

平成 25 年 7 月 19 日

## 前期も終盤で試験が始まり、夏休みの課題も見えてくる

学長 木元 幸一

夏目漱石の“吾輩は猫である”に出てくる物理学者寒月のモデル寺田寅彦が、今から 90 年以上前の大正 7 年（1918 年）に以下のように述べています。「大学の専門の学生でさえ講義ばかり当てにして自分から進んで研究しようという気風が乏しく知識が皮相的に流れやすいのは、小学校以来の理科教授（教育）がただ与えられた知識を覚えれば良いというように教えこまれている結果であろう。」当時から指摘されていたことが、90 年以上経ても、依然として今の時代にもそのまま当てはまっていると思われます。理科教育や研究に限らず、一般的な勉強と言い換えてもやはり自ら学ぶ姿勢の重要性が昔から、そして低年齢時の教育から言われ続けていたこととなります。近年、文科省からの指針として“受動的学習態度から能動的学習へ”、“アクティブ・ラーニング”と同じようなことが言われているところを見るとこれはなかなか難しい問題で克服できていないことと思わざるを得ません。寺田寅彦は、その原因は教える教師の側にあるとし、「質問に直ぐに答えが見つからなかった場合、誤魔化した答えをすることは良くない。逆に答えが直ぐに見つかった場合、それは、これこれ、かくかく、云々と事も無げに答えてしまっては良くない。」と書いています。何れも相手と一緒に考えようとする、何か一緒に新しい発見をしようとする態度が必要であると説いています。この態度というのは、今では教師と学生の両方のことになると思います。授業というものの成り立ちを考えると、教師と学生が双方で盛り上げて、充実した有益な時間を作り上げていくと考えたほうが良い。最近では、学生の方が忙しいのか、説明を遮ってまで直ぐに答えを聞こうとする傾向があります。返答者にとっては、質問となる疑問がどのへんから湧いてきたのかを辿っていかないと、当人が期待している答えを見つけられないし、その辿りがないと疑問の湧いてくる原因が探れないので質問経験による成長が得られません。マークシートによる解答が富に多くなっているとはいえ、クイズの答えを探すのと勉強の質問は違うのです。

今は昔よりも、さらに物事が進歩し、色々と便利になった分、学ばなければならない知識というのはどんどん増え、知識の獲得に掛ける時間が多くなって来ています。かなりの知識量をもとにしないと考える段階に達することができないのでなかなか自分の考えを持つまでに至らず、自分の言葉に置き換えて話すよりも書かれている文章をできるだけ正確に再現することに終始してしまう傾向にあります。今盛んに必要性が叫ばれている表現力や討論能力といっても、借りてきた付け合せの言葉でもって議論に参加した場合、知識不足と認識不十分が次から次と露呈し、変節甚だしくただの思いつきだったのかということで信用を失くすか、逆に、思いもかけず主張が通ってしまうと、その場しのぎで無責任な人間が蔓延はびこってしまう。直ぐに結果を求めるばかりでなく、しっかりと詰め込む時間とそれを熟成する時間を持つようとする覚悟が必要です。

極めて基本的なことですが、確かな計算力をつける練習、漢字や言葉を覚える練習、英単語を覚える練習、文章を正確に読み取る注意深さの養成、図表や化学式を書けるようになる鍛錬等々が欠けたままで、成績の結果だけを求めることは、誤った考えです。一方、丸覚えしてしまう点数稼ぎも、その場しのぎで忘れてしまい、将来の自分の伸びに繋がりません。試験に通過するだけの丸覚えは、結局中途半端な知識に終わるだけで、さらに“読書百遍にして、義自ずから見わる”までやるのです。この言葉は、

戦国時代の単なる戦記物・英雄豪傑物語と思われているでしょうが、あの「三国志」の中の言葉だそうです。直ぐに分からないことをポイして安易に片付けてしまわないで、100回とは言いませんが分かるまで繰り返すか或いは、疑問点が明確になるまで穴の空くまで読む、書くという一つの叡智を獲得するプロセスを大事にする心掛けを持ってもらいたいと思います。夏休みは貴重な自分の時間をたくさん作れる時期です。是非、読む、書く、計算するという（読み書き算盤と昔は言われていた）ことを根気よく繰り返し、“義自ずから見わる”という経験を一度か二度で積んでもらいたいと思います。そして、前期の授業を経て、残っている疑問、理解できなかった箇所を後期に持ち込まず、夏休みの自分の課題として取り組むことによって解決してもらえると期待しております。e-kaseiのUPO-NET等も、夏休みに役立つツールです。